

「底が突き抜けた」時代の歩き方 275

幸せな「現実」を選択すればいいんだ - 映画『夏至』

ベトナムといえば、思わずベトナム戦争と短絡的に結びつけてしまう判断停止状態に陥りやすくなっている。ベトナム戦争のベトナムしか知らないからだ。ではベトナム戦争のベトナムについてどれほどのことを知っているかといえば、実は何にも知らないのである。いままで何の関心もなく、知識もなかったアフガニスタンが米軍の空爆をきっかけに、カンダハルやカブールなどの地名と住人たちがテレビに再三映しだされるようになる、なにか知った気になるのと同じだ。全くの錯覚である。私たちはベトナムのこともアフガニスタンのことも、知っているつもりの世界のあちこちについても、なあんにも知らないのである。だいいち、自分が住んでいる日本のことについても、どれほどのことを、知っているというのだろう。知っている振りをしないことだ。そのことが、とにかくなにかに触れる糸口になるにちがいない。

トラン・アン・ユン監督の『夏至』は、確かに現在のベトナム、いやハノイの人々がゆったりと日々を過ごしているその佇まいを、静かな時間の流れの中で運んできてくれるのが、ふっと感じられる映画である。佇まいと書いたが、それは暮らしぶりの佇まいであるよりも、不倫の佇まいといったものであり、不倫の佇まいのなかに日々の暮らしぶりが織り込まれているといった風情なのだ。実際、この映画の登場人物の数組が不倫にかかわっているどころではなく、登場人物のすべてが、いや、すでに亡くなっている故人までが不倫の匂いを漂わせているのだから、ベトナムでは不倫もまた文化であり、不倫しながら日々の生活をきちっと送ることに精力が注がれていると思ひ込みたくなるほどである。もちろん、監督のまなざしは、それぞれの不倫（の匂い）によって関係がばらばらになっていくのではなく、不倫（の匂い）もまた、生活のリズムに組み込んでいこうとする人々の知恵のやりくりのほうに向かっている。

映画パンフをめくっていると、《ヴェトナムはチカラで満ち溢れている。》という書き出しで、元・在ヴェトナム日本大使公邸料理長で漫画「大使閣下の料理人」原作者の西村ミツルという人が、《いろいろな食材をゴチャ混ぜに煮てしまう「ラウ・タップ・カム（五目鍋）」が生み出す猥雑で甘美な味にも似た「ヴェトナムのチカラ」》に言及している。その一つが、蒸し暑く寝苦しい夜が続く7月のハノイで、クーラーなどもなく夕涼みをするために、《一家全員（平均4人）で一台のバイクに便乗して》、夕涼みに出か

けるという異様な光景である。《涼しさを求めて何百台ものバイクがホアンキエム湖の周りをグルグルとただただ回る》だけなのだ。《訳がわからない》が、《凄すぎる！》と筆者は納得する。

もう一つは、けっして珍しくはないベトナムでの不倫についてである。《鳥が空を自由に飛ぶように、人もまた自由に恋をする。どうやらヴェトナム人の中には「妻帯者だろうが、亭主持ちだろうが、自由に恋愛してなにが悪い！ 妻はバレなきやいいのよ！」というコンセンサスが出来上がっているようだ》として、次の実例を挙げる。大使公邸のヴェトナム人スタッフのメイド（26歳）と警備係（27歳）が、共に既婚者で子供がそれぞれ一人いながら、いつのまにかデキている。同僚のヴェトナム人スタッフたちは、小言の一つも言うどころか、《なんと二人の勤務時間がうまく重なるようにみんな協力してシフトを調整していたのだ。》周りが祝福する神経に、筆者は唖然とする。「ヴェトナムのチカラ」は、不倫をすることで、毎日張りがあって楽しく過ごすことができたならハッピーという気分が湧き上がってくるのかもかもしれないが、しかし、もしバレたらどうするのだ。天国の次は地獄が待ち受けているのじゃあないのか。映画はその地獄めぐりを描いているとあってよい。ストーリーはこうだ。

母の命日に集まった美しい三姉妹は、父より1カ月早く生まれた母の死の1カ月後に、母を追って父も死ぬほど仲のいい夫婦だと思われていたのに、母には父以外の好きな男性がいて、死ぬ間際にその男性の名前を呼んだという、次女の夫が立てた仮説に否定しきれないものをそれぞれが感じる。母の秘密によって自分たちのかかえこんでいる秘密が^{あぶ}炙り出され、晩年の父と母の不安な関係が、自分とそれぞれのパートナーとの関係に射し込んでくる気配をどこかで感じ取っているのだ。

長女はカメラマンの夫との間に幼い息子がいるが、過去の流産が契機となって夫婦関係は冷えている。夫には別の土地に愛人と子供がおり、彼女もある青年と逢瀬を重ねている。そんな長女は、死んだ両親の関係を詮索することに強く反対する。

新婚の次女は小説家志望の夫に妊娠を打ち明け、姉妹にも内緒にして夫婦の秘密にしておこうとする。両親の関係を詮索する夫は執筆がスランプに陥って旅に出かけ、旅先で出会った知人の女性に夫が自分の妊娠を話したことに彼女は不快感を覚え、帰ってきた夫の背広から口紅で部屋番号を記した紙片を見つけて、夫の浮気を信じ込む。

学生の恋人がいる三女は、同居している役者志望の兄のほうに強く惹かれている。兄に恋人のように振舞い、人から恋人同士のように思われるのを無邪気に喜んでいるが、兄から釘を刺されても意に介せず、近親相姦的な危ういエロティズムに浸っている。

さて三者三様の結末は、どのようにつけられていくのか。夫の浮気を感じ取って、青年を相手に奔放なセックスを楽しんでいるようにみえる長女は、この関係に未来を見出

せず、いまでも夫を愛しているために、情事にのめりこめばのめりこむほど、不安と孤独に苛まれ、満たされぬ思いに渴いていく。ビジネスマンの青年がサイゴンに帰る日がやってき、他方4年間の二重生活に疲れ果てている夫は愛人の許から早目に帰宅したある日、愛人と子供の存在を妻に話す。女と子供の存在をすでに知っていた彼女は、「あなたの話を聞いて、一つ分かったわ。自分の過ちで私を愛せなくなったのよ。その女と子供を捨てるとは言わないわ。あなたは二つの家族を愛してる。出張から戻ったら、もう一度やり直しましょう。私の望みは妻であることよ。前よりも愛される日を待つわ。また昔のあなたに戻ってほしいの。結婚する前のあなたに」という。そんな妻の肩に夫は手を置き、妻も自分の手をその手に重ねるシーンが映し出される。

一体、これはどういうことなのだろう。湖のほとりの村にある別宅での若い愛人と幼い男の子の三人の静かな充実した暮らしぶりをみると、夫がもはや妻を必要としていないことがわかる。必要とされていないことを感じ取った妻は、行きずりの青年との情事で心の空洞を満たそうとするが、満たされない。いまでも夫を愛している自分の気持がますます強まってくるばかりだ。彼女にとって最大の問題は、この地獄のような日々から脱することであって、別の誰かとの情事を繰り返すことでもなければ、夫の不倫を責め立てて結婚生活を解消することでもない。彼女の出した結論は愛人を選び取っている夫に対して、自分がかつて愛した「昔のあなたに戻ってほしい」、「前よりも愛される日を待つわ」ということであった。つまり、愛人との家族も自分との家族も共に壊さずに、夫はどちらの家族も手を抜かずに愛さなくてはならないということであったのだ。

不倫がバレてしまえば、必ず二者択一の間を辿るほかない欧米文化からすれば、あれもこれもかかえこんだところで最良の策を見出そうとするベトナム人のこの方法は、とても不思議な気がする。このことについて、トラン監督はパンフ収録の中で、次のように説明している。《ベトナムには儒教という文化的背景があり、そのような問題に対してどう接するかは他の国とは違います。問題を認識し抱えながら調和を保つ、それがベトナム人のエスプリです。ベトナムでは、夫婦は子供たちの前で仲の悪いところを見せません。子供の前では喧嘩をしないし、嫌なところは見せない。自分の親もそうでした。だから子供たちは何も知らずに、夫婦関係に対して幻想を抱いています。結婚してからその先に訪れるものを知りません。だからナイーブで純真な気持ちで恋をします。そこが美しいと僕は思います。子供たちは親の悪いところを忘れ、良いところだけを心に留める。

本作の中では、母と初恋の男性との間に何かがあったかもしれない、長女はそのことを最初に感じ取り、その話をするのは止めようと言う。封印したいという気持ちがある。問題はあるかもしれないが、母の良い思い出だけを記憶に留める。それが問題を目の前

にしたときの“調和”であると言えますか。生活の中の調和が本当に存在するかどうかは判りません。それは幻想かもしれませんが、調和を欲する気持ちは真実なのです。調和をとり、調和を利用しながら均衡を保って生活することが大切なのです。》

「調和をとり、調和を利用しながら均衡を保って生活する」のは、「儒教という文化的背景」の中でそうしなければならないからではなく、幸せな人生を送るためである。「夫婦は子供たちの前で仲の悪いところを見せ」ないのも、夫婦関係に対して幻想を抱くほうが、幻想を抱かないよりも、子供たちが結婚してから幸せな人生を送りやすくなると信じているからだ。「子供たちは親の悪いところを忘れ、良いところだけを心に留める。」のも、記憶の中に留まる親の良いところが、子供たちの人生を幸せにするからである。だから、長女が初恋の男性との間に何かがあったかもしれないそのことを封印して、「母の良い思い出だけを記憶に留め」ようとするのも、自分が幸せな人生を送るためなのだ。夫の不倫の代償行為のような行きずりの青年との不毛な情事をたっぷりと味わっている彼女が、自分の不幸を他人にばらまくような生き方ではなく、もう一度幸せな人生を送ろうとして、そのための最適の方法を編みだすのも、「調和をとり、調和を利用しながら均衡を保って生活すること」を願ったからである。

長女と同様に三女も、死んだ両親の関係を詮索することに反対するが、恋人気取りで兄に接して、兄からなんといわれようとも、憧れの兄と共に暮らしている快適さを優先する彼女からすれば、今更母の不愉快な部分を掘り起こしてどうなるのか、嫌な気分になるだけだわ、という思いであったのだ。嫌な気分になってでも耐えなければならないことがあるのであればまだしも、単なる想像ゲームにすぎないのであれば、自分たちがいま送っている幸せな人生にとって、それはマイナスにしかならなかった。両親の関心に興味をもって詮索するのは次女の夫であり、その詮索が自分たちの現在の生活にどのような影響を及ぼすのかを全く考慮の外に置く彼らが、本当は浮気をしていない夫を状況証拠によって妻が浮気していると信じ込む関係に落ち込んでいくのは当然と思われるけれども、なんとも皮肉な話である。

夫の不倫、自分の情事という「現実」が目の前にあり、その「現実」をどのように捉えることによって、「現実」の中での自分が一番幸せな人生を送ることができるかを、長女は必死に考えようとしていた。また、三女も憧れの兄と共同生活をしているという「現実」の中で、自分にとって一番幸せな過ごし方を選択していた。ところが、夫の浮気は存在していないという「現実」の中で、次女は夫が浮気していると思い込むことによって、不幸な生活を味わっていた。確かに映画の中で夫の浮気が存在しなかったことを知る観客と異なって、妻である次女にはそのことはわからない。浮気があったかもしれないし、なかったかもしれない。それは「母と初恋の男性との間に何かがあったかも

しれな」し、なかったかもしれないという関係にそのまま置き換えられる。

あったか、なかったかということの前では、あったと想像することも、なかったと想像することも可能である。どちらを選択するかの最大の規準は、選択したことが選択した本人にとって幸せであるかどうかということだけだ。次女は夫の浮気を疑う前に、状況証拠を先に疑って、夫の浮気を信じないようにすることもできた筈である。だが、母と初恋の人との関係を詮索する立場を取ってしまっている彼らには、自分たちの関係を詮索することしかできなかったのだ。もちろん、ここで重要なのは次女たちの問題ではない。ない「現実」も信じ込むことによって、ある「現実」になるのであれば、大事なのは「現実」ではなく、その「現実」に施す解釈であるということになる。そしてその解釈は無数にある。無数にある解釈の中で、自分が一番幸せな人生を送ることのできる解釈を選択すればいいということだ。そこでは「現実」などわからなくなっているからだ。どの解釈を選択するかによって、その選択に応じた「現実」が目の前に広がってくることは明白である。

この映画を観た者は誰でもそう感じるにちがいないが、熱気、雑踏、混沌のイメージに彩られた にぎやかなアジア ではなく、それとは対照的な 静かなアジア が映像の隅々にまで行き渡っている。映画評論家の黒田邦雄はパンフの中で、「澄み切った湖面のような静ひつ」さという形容を用いて、《ここには不倫の息苦しさも猥雑さもなく、すべてを超越したような静けさだけが漂う》と書く。デビュー作『青いパイアの香り』『シクロ』に続くこの作品で、監督は初めて 言葉のある映画 を撮ったと語り、沈黙 の時間の中で言葉を浮かび上がらせていくことと、台詞をメロディーのように音楽的に用いたことを説明している。そういえば、映画の中で長女が口ずさみ、酒宴の席でみんながベトナムの歌を歌っている場面などが映しだされ、監督によれば、流行歌はなく、ひとつの歌が長く歌い継がれていき、家具など本当に必要なものが何世代にもわたって使いこなされていくベトナムの人々の気質が歌にも溶け込んでいるということだろう。

滔々とした悠久の流れに浸る佇まいといった雰囲気醸し出されてくるが、イラストレーターのこぐれひでこがパンフの中に書いているように、《映画の中で三人姉妹が抱き合って眠ったり、兄妹がダンスをしたり……日本ではアララ?》といった場面に驚くこともしばしばである。《ヴェトナムの人は昼寝が得意だ。イヤなことがあれば眠り、嬉しいことがあれば眠り、眠ることによって人生をリスタートさせているように見えた》と書いていることでは、そんな気配が全編を覆っていることは確かだ。映画を観ることの楽しみの一つは、際立った文化の違いを覗き見することにあるのだから。

2002年1月21日記